

## 学園四十六年 渡辺篤先生

橋 本 長 四 郎

渡辺篤先生には、大正十五年四月、旧制成城高等学校創設以来、本年三月まで、実に四十六年間の長きに亘つて（東大応用微生物学研究所教授の時代も講師として講義をもつて頂いた）、大変な数の成城大生や当時の高等学校の生徒にお教えをいただいた。

先生は、衆知の通り植物学とくに微細藻類の研究で、後掲の如き多数の立派な業績を挙げられた斯界の第一人者でいらっしやる。今回の榮譽ある叙勲（勲三等瑞宝章）は、やや遅れ馳せの感は免れぬものの、当然のことであつて、心から慶賀の意を表する次第である。ここでその偉大な業績の内容を御紹介し頌功すべきところ、紙数の関係もさりながら、これは浅学の門外漢である不肖の到底なし得べきことではない。

先生が熱中されたお忙しい研究生活の中での教え子達への配慮の尋常でないことに、常々敬意を覚えている。学習の指導は勿論、学生の生活や悩みごとの相談相手としても何時も親身になる先生である（大学のクラス担任とは、私自身を含めて、全く名ばかりの存在であることを、当時学生課長として嗅いでいた頃、先生はクラス担任として、学生との懇談時間のスケジュールを発表され、研究室を訪ねて来る学生に自らコーヒーを入れてすすめながら相談相手になってお

られたことを知っている。更に問題がいろいろ多かった終戦前後の生徒課長、近年になってカリキュラムが問題にされはじめた頃の大学の教務部長等々、研究者にとっては大変手痛いであろう職務を学園や大学のために献身的に責任を以って遂行された。その上、文科系の大学であっては止む得ぬことではあるが、大変粗末な実験室で、これらの条件を乗り越えての研究成果であることを思うと、先生の偉大な能力と研究熱心さにしみじみと頭が下がる。

最近でも、先生は助手もいない実験室で、御高令にも拘らず、数百という数の容器を御自身で滅菌され、夏の西日の照りつける実験室で、窓を閉め、扇風機もとめて、一つ一つ藻類の種を植えておられた。何度かお手伝しますとお願いしても、「いや、これは一寸コツがあるので、自分でやらないと」と汗だらけの優しい笑顔で答えられるばかりだった御姿は、生涯忘れることができない。(戦時中、高校生として先生の植物学の講義を教授していた。以来、今日まで最も御世話になりながら最も不肖の役立たずの弟子である私の拙文が、先生の榮譽を傷つけはしないかと心懸りでなりません。お許し下さい。)